

〔論文〕

## 都市化社会における国内都市移住者の研究視座

——都市同郷団体を検証の素材として——

湯 浅 俊 郎

（文学研究科社会学専攻博士課程後期）

### はじめに

本稿は農山漁村や地方都市から大都市圏への移住者が、移住先において同郷であることを契機にして、出身地域における人間関係を再編成して結成する都市同郷団体<sup>1</sup>を次の点から注目する。

戦前における人口移動の動向は、国勢調査と人口動態統計により次のように明らかにされている。一九二〇（大正九年）と二五（大正二四年）年の五年間に、東京府では五八万八六四人、大阪府では三四万四九五五人、愛知県では八万八七六四人の人口の流入超過となっていた。つまり、当時既に、日本全国の中で一方において人口を他地域から奪い取る有力な都市地域があり、その反面において人口を流出しなければならない弱体な地域が存在したということである（総務庁統計局一九九〇）。

黒田俊彦（一九七九）は「日本における人口移動の歴史的特徴は農村から都市へ、農業から非農業への古典的移動パターン<sup>2</sup>の持続性にあった」とする。具体的には、全国の農村的諸県から、南関東によって代表される東京と、京阪神に

よって代表される大阪の二大都市に向つての移動パターンが主流になっていたことである。戦前の一九二〇（大正九）年から一九四〇（昭和十五）年までの二〇年間における純増加は、南関東では二五九万人、京阪神では二二二万人であった。戦後になると、一九四七（昭和二二）年から一九七〇（昭和四五）年に至る二三年間で、南関東は六二二万人、京阪神では三二一万人と激増したのである。

宮本憲一（一九八〇）は、一九二〇年前後から約二十年間を第一次重化学工業化（第二次重化学工業化は一九五〇年代後半以降である）が起動力となつた「第一次都市化」とする。それに対して、一九五五年以降、約二〇年間を高度経済成長が原動力となつて大都市化が進んだ「第二次都市化」と位置づけている。

かつて、柳田國男（一九二九）は、都市において「市民の一小部分はわずかに二代三代前の移住者の子であり、他の多数は実は村民の町にいる者に過ぎなかつた」<sup>3</sup>ことを指摘している。近代都市の人口増加の主要な部分は農村からの都市移住者によるものであることと、この柳田の指摘から次のことが分かる。日本の都市において、先祖代々から東京や大阪などの大都市に住んでいる場合は少ない。したがつて、近代都市は主に国内都市移住者（地方出身者）によつて構成されていった。つまり、日本の近代都市の形成は主に国内の農村部から都市部への人口・労働力移動によつて支えられてきたのである。また、その中で農村部から大都市圏への移住者によつて結成されている都市同郷団体について、先行研究（松本通晴・丸木恵祐編一九九四、鯉坂学一九九五、一九九七等）から主に次の点が明らかにされている。それは、都市同郷団体は都市移住者の移住や都市生活の適応組織としての機能・役割を持っているということと、都市同郷団体を介して仕送りや各種の寄付など都市移住者において移住先の都市と故郷である農村との間につながりがあるということである。また、鯉坂学による一九九五、一九九七年の全国市区町村調査によれば、自市区町村出身者が結成している同郷団体の存在を把握している自治体は、地域的に偏りはあるが、ほぼ全国的に分布していることが分かる（一九九八）。したがつて、同郷団体の存在の一般性と偏在性も明らかにされている。

そのことから本稿は、まず、都市同郷団体における都市移住者の適応組織としての機能・役割に焦点をあてる。そして、国内都市移住者の動向を明確にしていくことにより、戦後における日本の都市社会の形成過程を分析していくことを目的とするものである。

## 1 日本の都市における地域統合の捉えられ方

——都市形成過程における地域統合の問題として本稿の研究の位置付け——

### 1・1 都市地域社会について

都市化過程において農村部から都市部へ移住者が流入してくることにより、都市地域社会は大量であり且つ異質な人口を受け入れることとなる。そのような状況において、都市地域社会はどのように地域統合を果たしてきたのかということが問題となる。そのことから、この節では、本稿の研究を位置づけるために地域統合の問題として、主に社会学において日本の都市地域社会はどのように捉えられてきたのか振り返ってみる。

鈴木栄太郎は結節機関説を提唱し、都市を次のように捉えている。

都市は、国民をことごとくもれなく交流せしめ、有無相通ぜしめ、同じ型の文化を流布し、生活の秩序を保たしむるための地域的に組織的な社会的結節であるということが出来る。……中心都市の支配下に大きな地方都市を八方に配置し、更にその下にくまなく分散配布している一國領土内の大小の聚落社会配置の組織は、国民生活の経済的な調整のための合理的な組織であるとともに、政治的な鎮圧統治の巧妙な組織であり、また全國民の文化斉一の機構となつて<sup>(1)</sup>いる。

都市化社会における国内都市移住者の研究視座

鈴木栄太郎の場合は生業を営む「正常人口の正常生活」に着目しているために趣は異なるが、このように都市を一方的に捉える枠組は日本における都市研究の主要な展開である。特に、高度経済成長期において、人々の孤立化、個人化などの大衆社会的状況において地域社会の問題処理の低下や伝統的コミュニティの解体などが問題視されるようになる。その時期において、研究動向として次のような傾向が見られる。つまり、かつて磯村英一が病理現象として都心の盛り場（第三の空間）における解体状況の調査研究を行ったように、都市化における社会解体の側面だけが強調される傾向がうかがえるのである。そのことから地域統合のありかたとして、住民意識の転換による地域社会の自治能力を図った新しい「コミュニティ」の形成など「共同性」のありかたに焦点があてられた研究動向が見られる。

例えば、奥田道大（一九八三）は地域社会の分析枠組として、①「地域共同体」モデル：特殊の閉鎖的系の地元共同意識とぐるみ連帯行動に住民が支えられている。②「伝統型アノミー」モデル：地域共同体が解体し、地域住民相互のむすびつきはよわく、地元共同作業への連帯化をうながすムラの規制も失われている。③「個我」モデル：特殊の閉鎖的ならぬ、普遍的開放的系の住民意識を有し、住民の属性としては、新来住層、新中間層（組織労働者階級もふくむ）、高学歴層、若年齢層、革新政党支持者等にポイントがみられる。シビル・ミニマムのな権利意欲に媒介された「個我」の自覚といてよく、共同体的価値秩序の完全な崩壊、解体を前提としている。④「コミュニティ」モデル：相対的に高学歴、高生活水準、頭脳部門的「職業等先導的要素としつつも、固有の属性に排他的に集中かつセットされないところに特色がある。地域へのかかわりは、住民主体の生活基盤として選択、位置づけられている。そして、住民主体の生活基盤が創出される過程で住民相互の関係は深められ、行政過程との自主的対応ははかられる。の四つのモデルを提示する。奥田は「地域共同体」モデル、「伝統型」モデル、「個我」モデル、の三つのモデルは「コミュニティ」モデルへの展開のポテンシャルを内在していると看做する。そして、奥田は、「運動」モデルとして把握することが可能な「コミュニティ」モデルを、地域における新しい共同座標軸として位置づけている。

似田貝香門（一九七六）は住民運動の把握が、地域の構造の「総体」を捉える媒介的手段としての意味を有するとし、一九六〇年代後半から噴出する住民運動の成立と展開過程を次のように類型している。それは「住民運動が住民の日常的な媒体組織（町内会、既成の政治過程、地域政治状況）とどのように関連するとき、どのような運動過程を展開するのか」を問題にしたものである。(1) 日常の媒体組織への連繋型・住民運動が当初の運動目標の達成を放棄し、あるいは低位平準化して、〈条件運動〉となっていく場合。(2) 日常の媒体組織からの離脱<sup>⑤</sup> 独立型の運動体・住民運動の成立時点、ないしは、展開過程において、目標達成の諸資源<sup>⑥</sup> 装置の可能性やその抵抗機能が脆弱であるという自覚や反省がなされた場合、この運動体は、〈日常秩序〉からの離脱<sup>⑦</sup> 独立による運動を行う。それは、相対的にヘラディカルな運動<sup>⑧</sup> となる。(3) 日常の媒体組織の再編<sup>⑨</sup> 強化による運動体・生産<sup>⑩</sup> 生活基盤そのものが開発によって解体されるという見通しが自覚される場合に成立し、「日常実感平等主義」のヘラディカル化<sup>⑪</sup> へと展開する。の三つである。

似田貝は「成功した住民運動の多くは、組織化<sup>⑫</sup> 『実践集団』化が、既存集団から相対的に、ないしまったく独立した場合<sup>⑬</sup>」であると指摘している。つまり、この似田貝の指摘からうかがえるように、都市の大衆社会的状況において、実際の現場では「既存の地域住民組織との融合と緊張関係<sup>⑭</sup>」に焦点があてられた研究動向が見られるのである（町村敬志 一九九九）。

### 1・2 都市化における既存の地域住民組織について——町内会研究の動向——

それでは、既存の地域住民組織はどのように捉えられてきたのか見ていくことにする。町内会は、日本の都市を特徴づけ、日本社会の基礎を構成している「集団の原型」「文化の型」であるとも言われている。また、その地域住民組織は「包括的機能」を有し「生活充足機能」と「地域統合機能」をもつ（菊池美代志一九九〇）とされていることから、都市化において町内会はどのように捉えられたのか、その研究動向を見ていくことにする。

岩崎信彦（一九八九）は、町内会の歴史的出発点を次のように提示し、その都市地域住民組織を「住縁アソシエーション」として位置付けている。

一七世紀後半から、民衆による富の蓄積、貨幣経済の発達によって、惣的な共同体的結合を優位させていた町や村は、しだいに個別家族の論理、商人の論理を優越させてゆく。家内の平和、勤勉・禁欲・営利追求の第一義的強調が始まるのである。まさに今日的な町内会への変容の始まりなのである。土地所有に強く結び付いた地縁的住民共同体から、必ずしも土地所有者ではない町内居住者の『住縁アソシエーション』の歴史的出発点が与えられた。<sup>(9)</sup>

そして、岩崎は「人々は生活のさまざまな苦難の経験を経ながら、日本社会の民衆的で自治的な再建のために、一方で町内会⇨住縁アソシエーションの存続に努力し、他方で多様なアソシエーションの創造の営みを発展させるであろう」と捉えている。<sup>(10)</sup>

玉野和志（一九九三）は、まず現代の町内会の起源を大正から昭和にかけて都市化した地域において、コミュニティの「共同防衛」の必要性から生まれた地域住民組織に求めている。「町内会体制」が成立した背景として、「近代日本の都市化にともなう社会層の分化があり、かつての地方名望家層にたいして、その分解のなかから『都市自営業者層』が台頭した<sup>(11)</sup>」ことをあげている。つまり、「町内会の全戸加入の原則はコミュニティの『共同防衛』の必要から必然的に要請されたと同時に、地方名望家層に加えて『都市自営業者層』を新しく迎え入れることを意味していた<sup>(12)</sup>」ということである。玉野は「町内会は近代の都市化や『大衆民主化』に対応した地域組織の日本的形態であった<sup>(13)</sup>」と検証している。

中田實（一九九八）は「地域社会における住民としての暮らし（それが含む多様な行動）は、一方で既存の地域秩序を

維持、再統合する意味を持つとともに、同時にその同じ行動が住民の共同と自治の実践という面ももつことが認められる」とし、地域共同管理の主体として町内会の位置づけを行っている。

このように、町内会研究においては、その地域住民組織のありかたに焦点が当てられている。その研究動向においては、町内会のありかたについて「地域統合における近代性と伝統性の二重性の解明」(町村一九九九)や地域社会復権の「インキュベーターとしての可能性」が追求されたのである。町内会研究が、このような動向をたどった要因として、次のことが考えられる。地域の歴史性、社会共同消費手段の整備の程度や行政による各種の社会的サービスの深化等により地域の共同生活条件に差異がある。そのことにより、町内会の存在形態や地域住民の包摂の形態も多様であることから、その都市地域住民組織の実態を一つに収斂させて捉えることは困難である。さらに地域住民の個々の階級・階層などの属性や居住歴により、各個人においても町内会の機能・役割の程度は様々であると考えられる。したがって、地域統合の問題として、日常生活の適応において町内会がどのくらいの機能・役割を果たしているのか、分析のレベルを個人的なレベルにまで進めると、その都市地域住民組織の存在の意味が曖昧となる可能性がある。つまり、町内会は地域社会において多様な業を展開するアソシエーションとして、その実態よりも可能性に研究視座がひらかれる都市地域住民組織であると考えられる。

### 1・3 小括

これまでの研究動向を都市化における地域統合の問題に関して見て行くと、都市地域社会の現状や展開などを検討していくために、「コミュニティ」の形成、町内会・自治会、市民・住民運動などの都市地域住民組織のありかたや、その可能性に焦点が当てられた傾向が見られる。つまり、都市地域社会はどのようにして形成されてきたのかについて、特に次のことに対する関心はこれまで少なかった。それは、日本の近代都市の形成は、主に国内における農村部から都

市部への人口・労働力移動によって支えられてきたということである。したがって、国内の都市移住者が、移住先の都市で遭遇する異文化接触に伴う住民間の摩擦や差別化といった問題や、国内の都市移住者が、どのようにして都市に根付いたのかについての研究に関しては次のことが言える。その研究については、松本通晴・丸木恵祐編『都市移住者の社会学』（一九九四）や富山一郎『近代日本社会と「沖縄人」』（一九九〇）等の調査研究があるが、それらの研究は都市移住者の実態把握にとどまり都市地域社会の形成過程との関連ではあまり分析されてはいないのである。

地域社会の形成という問題に対して、移住者に焦点が当てられるようになるのは、一九八〇年代のバブル経済の拡大と「国際化」「情報化」の進展において、日本経済の国際化にともなう外国人労働者の流入という事態が起こってからである。つまり、その課題に対して、日本人と外国人（移住者）との共生についての「コミュニティ」研究が展開していく。そのことにより、移住者（外国人労働者）に焦点が当てられるようになるのである（奥田・田島編一九九一、一九九三、一九九五、奥田編一九九五）。こうした一連の研究の流れから、本稿は都市移住者の適応組織である都市同郷団体を視点にして、国内都市移住者の動向を歴史的に解明していくことにより、これまでの都市地域社会の形成過程について分析していくことを目的とするものである。

## 2 理論的前提

### 2・1 ワースのアーバニズム論

シカゴ学派のL・ワース（一九三八）は、アメリカの都市シカゴを素材にして、アーバニズムを都市における特徴的な生活様式と規定し、都市について分析的な理論図式を示した。L・ワースによれば、アーバニズムとは、人口規模、人口密度、人口の異質性という都市の生態学的な属性である三つの変数により生じるものであり、三つの変数の程度が



大きくなるほど、アーバニズムと結びついた性格が強められるとする。L・ワースのアーバニズム論における都市的生活様式は、第一次的接触よりも第二次的接触到特徴づけられ、人間生態学、社会組織、社会心理学の三つの視角から捉えられている。それは主に、①住民の個人的特性、職業、文化的生活および観念は、村落住民よりも広く分離した極に広がっている。そのことから、人種、言語、収入、社会的地位などにおける差異によって諸個人の空間的凝離が発生する。また、個人の高度な移動(mobility)は、個人を多種多様な大量の諸個人による刺激の射程内に連れ込む。そして、個人は都市社会構造を構成する分化した社会集団の浮動的な地位に従属するようになる。②親族の紐帯の弱化、家族の社会的意義の減少、近隣の消失、社会連帯の伝統的な基盤の崩壊が進行する。また、人々の物理的浮動性、社会的移動の結果として、集団成員の交替は急速である。そのことから、居住地、雇用の場所と性格、収入、利害は一定せず、組織の共同的な保持や、成員間の親密で永続的な知己関係の維持、促進は困難になる。その中で、人間のもつ欲求や利害と同じ程度に多種多様な目標をかけたがる自発的結社が増大する。そして、異質性により、多様なパーソナリティの型のあいだの社会的相互作用は身分的階級制度(caste-line)のカベをうちくだき、非常に分岐・分化した社会成層の枠がつくりだされる。③全面的なパーソナルな接触を不可能にする条件のもとで相互作用の状態にある人々が増加することにより、精神分裂の性格が生じる。また、他人のパーソナルな要求や期待に対して自分自身を免疫するために、人間関係における慎みや無関心や歓楽に飽きた態度が考え出される。そして、感情的・情緒的紐帯の欠如により「個人は、親密な集団のパーソナル(personal)で感情的な統制から、ある程度の解放と自由を獲得する一方で、主体的な自己表現、モラル(morale)、統合的な社会において生活のなかからうまれる参加の感覚など、を失ってしまう<sup>(16)</sup>」という。そして多様なパーソナリティと生活様式が入りまじることから、相対的な見方や差異をゆるす感覚が生まれ世俗化をまねく。などの仮説を提示している。

## 2・2 H・J・ガンスによる批判

H・J・ガンス（一九六二）は、社会経済的な地位、文化的特性、ライフサイクル段階などの住民の属性や地域における住民の流動性のほうが人口、密度、異質性よりも生活様式を満足に説明するとL・ワースのアーバニズム論を批判する。H・J・ガンスは、一九五七年一〇月から一九五八年の五月まで、アメリカのボストン旧市街地ウエスト・エンドのスラムに住むイタリア系移民（二世）を参与観察している。H・J・ガンスは、その報告をまとめた著書『アーバン・ヴィレジャーズ』（一九八二）において、イタリア系移民が、移住先の都市において同世代で、同じ社会—経済的レベルで、同じ文化背景を持ち、主に親族を基盤として利害、価値を共有するものが仲間集団社会（the peer group society）を形成していたことを報告している。また、ウエスト・エンドの社会と文化は、彼らの出身地域のものと同様であったということである。その類似していた例をあげると、ウエスト・エンドと同様に、出身地域においても、家族の世帯は核家族で、同じ年代の親類が結びついて家族圏（family circle）を構成していた。また、家族生活は成人が中心であり、移住先と出身地域ともに世代間の関係よりも世代内の関係を重視していたことなどが報告されている。このように移住先における彼らの生活様式が、出身地域と類似していることについて、H・J・ガンスは次のような見解を示している。

出身地域において、二〇世紀の初頭にアメリカへの集団移住が始まった頃、イタリア系移民の出身地域は農村であり、そこでは「土地のほとんどは比較的少数の大規模な不在地主（彼らのなかに、何人かは貴族階級がいた）によって所有され、不在地主たちは自分達の土地を小作農に貸すか、駐在の管理者が監督するもとで、土地を持たない日雇い労働者（day laborers）に耕作させていた」ということである。つまり、ウエスト・エンドに居住するイタリア系移民は、出身地域では不在地主そして管理者のために働く農場労働者であった人達で、剝奪（deprivation）された階級にいた人達であった。こうした彼らの出身地域における生活の状況は、移住先においても変わらず、H・J・ガンスが「実際

のところ、海を渡った彼らの船旅は、彼らを田舎町から都会の村へ出しただけである」と述べている。移住先のアメリカにおいて、ウエスト・エンドのイタリア系移民の二世が、成人期に入るまで、かなりの社会的、経済的、政治的権力はアイルランド系移民など他の移民集団が握っていたのである。

つまり、H・J・ガンスによれば、イタリア係移民が、ウエスト・エンドにおいて仲間集団社会 (the peer group society) を形成したのは、彼らが生活様式を自由に選択した結果ではない。それは、アメリカへ移住しても、ウエスト・エンドにおいてイタリア系移民が占める地域的な階層秩序の位置は、出身地域と同様に下層のほうに位置付けられていたからである。また、移住先のアメリカにおいて、彼らの生活様式が出身地域の生活様式と類似していたことはウエスト・エンドに居住するイタリア系移民が、自らの文化的特性を持ち込んだことによるのである。

H・J・ガンスは、このイタリア系移民における仲間集団は、移民三世の世代になると次のように展開していくという。それは、イタリア系移民が、未熟練、半熟練労働のほかにも新しく創出された職業に就けるようになったことが要因としてある。そのことにより、イタリア系移民は、教育を受ける機会が増大し、次第に裕福になっていく。したがって、イタリア系移民の間で相互の支援を必要とすることが減少していく。また、社会的な上昇移動、職業の専門化や異文化出身者との婚姻により、イタリア系移民の間で共通点が少なくなる。そのために、仲間集団はイタリア系移民の三世の世代になると中心的なものではなくなったということである。つまり、社会的上昇移動により、ウエスト・エンドのイタリア系移民の社会経済的地位などが変わる。そのことよって、自らの生活様式を確立することにおいて要求が実現できる範囲が広がったことの結果である。国や地域の経済・社会・政治制度などによつて、ウエスト・エンドに居住するイタリア系移民の収入や仕事に就く機会、生活水準などがある程度決められる。そのことから、ウエスト・エンドにおけるイタリア系移民の生活様式は、何の制約もなく自由に選択されたものではないということである。H・J・ガンスは別稿で「社会学者は、生活様式が都市的であるとか、郊外的であるとか、言うことはできない」という見

解を示しており、L・ワースのアーバニズム論に対して、都市それ自体の効果があることに批判を提示している。

## 2・3 C・S・フィシャーの下位文化論

C・S・フィシャーは、これまでのアーバニズム論の展開についてL・ワースが提起するものを決定理論(determinist theory)、H・J・ガンスが提起するものを構成理論(composition theory)、自身が提起するものを下位文化論(subculture theory)の、三つに類型化している(一九八四)。C・S・フィシャー(一九七五、一九九五)が提起した下位文化論は、構成理論が主張する経済的条件など社会構成によって生活様式を説明するだけでなく、都市における人口の集中性の効果をとりあげたものである。C・S・フィシャーは、まず、アーバニズムという用語によって「都市」そのものを指す。そして、都市が農村と異なるのは、人口の集中性から通念にとらわれない下位文化の生成が促進されていく点にあるとする。

C・S・フィシャーによれば、下位文化というのは「社会的世界」に近いものであり「明確な特性を共有し互いに交流を持つ多数の人々のセットである」という。また「その人々は自らの明確な特性に関連する制度の成員であり、独特の価値を支持し、文化的なツールのセットを共有している。そして、彼らは、共通の生活様式に参加する」ということである。次にC・S・フィシャーによる下位文化に関する命題を掲げていくことにする。

1 「地域が都市的になればなるほど、下位文化の多様性が増大する。」

人口の規模は、構造の分化を促し「競争や比較優位や結合の選択(associative selection)等が、互いに区別され緻密な内部構造をもつ下位体系を生み出し、この過程からは同時に、それぞれに結びついた文化が生み出されてくる」ということである。「これはとくに、社会階級や職業やライフサイクルや共通の利害にもとづく多様な集団として現れてくる」のである。また、大規模な定住地は小規模な定住地よりも、多くの移住者を吸収していること

から、それぞれの移住者が下位文化を持ち込むことにより下位文化の多様性は増大する。

2 「地域が都市的になればなるほど、下位文化の強度が増大する。」

この度の強度 (Intensity) は、アノミーや無規範とはまったく逆の状態を意味している。それは、下位文化独自の信念や価値や規範が存在し、それへの愛着や強制が生じている状態である。下位文化の人口の規模が、その活力を十分に維持できるぐらいに集まれば、換言すれば下位文化の人口量が臨界量 (critical mass) に達することにより、諸制度 (例えば、服装様式、新聞、結社など) が完備されてくる。都市が拡大すれば、一般的あるいは専門的な制度やサーヴィスが、数の点でも種類の点でも増加し、なかにはきわめて特殊なものもつくり出される。それは、各々に、臨界量に達する需要があるからである。こうした専門的な制度やサーヴィスが、下位文化の紐帯・凝集性・価値の受容を促していくのである。また、「ある地域の下位文化の規模や多様性が増大するにつれ」<sup>(8)</sup>て、下位文化相互の違いや紛争も増加し、結果として下位文化の内部がますます強化されていく。つまり、人口の増加による臨界量にもとづく諸制度の完備と下位文化の規模や多様性が増大することによる文化衝突を通して、アーバニズムは下位文化を強化していくのである。

3 「地域が都市的になればなるほど普及の源泉が増加し、下位文化間の普及が増大する」

ここでの普及 (diffusion) は、ある下位文化の成員による他の下位文化の信念や行動の採用を意味している。先述した強化過程とこの普及過程とは対抗的に作用しあう。つまり、二つの過程は、同時に進行し、結果として下位文化のなかでは強化される部分と普及される部分とが分かれてくるのである。C・S・フィシャーは、「普及がもたらす社会的結果のひとつは、文化諸要素を融合、あるいは組換えをし、それによって社会的革新を促す<sup>(9)</sup>」と述べている。

4 「地域が都市的になればなるほど、非通念性の程度が増大する」

特殊な下位文化が多くなれば、一般的な規範から逸脱する行動が多くなる。都市には、下位文化の成熟を保証するだけの十分な人口と、そうした下位文化の強化をもたらす文化衝突が発生する。「都市が拡大するにつれ、麻薬常用者や急進主義者、知識人や時流の先端を行く人々 (swingers) や健康食品の愛好者達は、有意義な数とまとまりをもって現われ出し、社会の支配的な通念に与える彼らの影響力(と同時に攻撃)も大きくなる」のである。

このように、C・S・フィシャーは、都市を、人口の集中性により、通念にとられない発想を豊富に生み出す場所であるとする。しかし、下位文化論は十分な経験的検証を経ておらず、理論の定式化において根本的な曖昧さがあることから、C・S・フィシャーは「下位文化論は有望な理論であるが、アーバニズム論として確立(否定)されたものではない」としている。

松本康(一九九二)は、社会的ネットワークの形成と下位文化の生成を結び付けてフィシャーの下位文化論を再構成している。それは、次にあげる一定の機会―制約のもとで合理的な選択をした結果を、社会的ネットワークの形成原理として捉えている。

① 社会・経済的地位、ライフステージ、性別、エスニシティ、などの社会的な地位―役割構造を意味する社会構造上の位置などによる制約／機会(構造的制約)

② 物理的なアクセスなどによる制約／機会(生態学的制約)

つまり、人口の集中性から都市には多様なライフスタイルが存在する。また、それを共有する人口が臨界量に達しやすいことから、「専門店」型の多様な社会的ネットワークが形成される。そこで、一定の機会―制約の範囲が広がれば、社会的ネットワークの分化が顕著になる。都市においては、接触可能な人口量の大きさゆえに、人との物理的アクセスなど生態学的な制約が縮減されるので、社会的ネットワークは多様化する。その多様な社会的ネットワークを基礎にして多様な下位文化が生成されるということである。

また、B・ウェルマン（一九七九）は基礎社会としてのコミュニティを先述したアーバニズム論の展開と響き合う次の三つに類型化している。それは都市化の展開において、コミュニティは衰退していくというコミュニティ喪失論（community lost）、社会関係が主に近隣地域に累積していることや親族、近隣者との強固な連帯など伝統的な密集（density）、同質性（homogeneity）、連帯（solidarity）を維持しているというコミュニティ存続論（community saved）、コミュニティは地域性をこえて分散した親密な絆（knit）であり、コミュニティ存続論が主張するものよりは異質（heterogeneous）で且つ強く結ばれた連帯ではないネットワークへとコミュニティは変化しているというコミュニティ解放論（community liberated）の三つである。

#### 小括——都市化社会（Urbanizing Society）検証の素材としての都市同郷団体の有効性

神島二郎（一九六一）は日本の近代都市の状況を、放縦と否認せざるをえない、あらゆる自己主張と実力社会に終始する自由、奢侈と乱費、不安定性などを特徴とする「群化社会」として捉えた。神島は、そのような近代都市の状況が、自然村出郷者に擬制村（第二のムラ（郷党閥や学校閥）の形成を促したことを指摘している。この神島の指摘から、L・ワースが述べるアーバニズムの裏返しとして、都市移住者により同郷というある種の第一次的接触に基づく社会的ネットワークが形成されたのではないかと考えられる。

つまり、

現実の都市では都市化過程のなかで、一方でワースの指摘したようなアーバニズムの諸側面が溢れ出ると共に、他方では都市同郷団体や都市親族組織の再組織化、エスニックコミュニティの形成のように、ある種の第一次的接触にもとづく関係や集団が、再編・再形成されつつ一定の機能を果たしている。<sup>30</sup>（鯉坂学一九九七）

ということなのである。したがって、都市同郷団体（同郷を基盤とした社会的ネットワーク）は、都市におけるL・ワースのアーバンズムの諸側面（第二次的接触の優位など）が一定の機会―制約となつて形成されたものであると言える。

また、都市同郷団体の視点について、鯉坂学（一九九五、一九九七）は、現代の地域社会の動向を総体的都市化として把握するだけでなく、都市と農村との相互浸透あるいは混住化の側面も位置づけたいとし、都市同郷団体を都市―農村関係の「相互」浸透の一面面としてとらえる視点を提起している。したがって、鯉坂の提起からもうかがえるように都市同郷団体は都市的なものに対してムラ的なものであり、都市における上位文化（都市的なもの）に対する下位文化（ムラのなもの）と位置付けられる。

松本康（一九九九）は近年の実証的研究の成果から「都市は自己充足的な地域コミュニティのモザイクでもなければ、原子化された大衆の集合体でもなく、社会圏の交錯した世界である」という知見を導き出している。松本康は、第一次近似として「決定理論」よりは「下位文化理論」を、「コミュニティ喪失論」よりは「コミュニティ解放論」を、都市のゲマインシャフト的構造のイメージとしては真実に近いものであるとしている。しかし、松本康は課題として次のことをあげている。

都市に張りめぐらされた社会的ネットワークは、どの程度、政治的・社会的動員能力をもっているのだろうか。

それはどのようなライフスタイル集団を生み出し、都市の文化的活力を支えるのだろうか。社会―空間構造とバーソナル・ネットワークを軸とする都市社会構造の分析は、こうした課題に向つて拡張されなければならない。（松本康一九九九）

このように松本康により提示された課題は、単なる量的なアンケート調査の限界を示すものである。その限界という



のは、まず、都市的集団を調査するにも、調査主体の知見の範囲でしか把握することができないということである。そして、ある都市的集団が実際にどのような機能・役割を果たしているのかということは、現場（フィールドワーク）でしか解明できないことである。

都市化社会（Urbanizing Society）を検証する素材として、都市同郷団体をとりあげることの有効性は、次のように考えられる。松本通晴は「都市に移住して来た地方出身者が、既存の都市の生活様式の中で、何を選択するのか、また、何を出身町村から受け継いで、それを都市生活のなかに移植して、都市生活を多様にし、より豊かにしていくのか、さらに社会と文化を創り出していくのか」<sup>(3)</sup>を議論すべき点としている。このような松本通晴の問題提起において、都市同郷団体は都市移住者の適応組織としての機能・役割を持っていることから、都市に対してある程度の影響を与えていると考えられる。そのことから、都市における多様な社会的ネットワークの中から同郷を基盤とした社会的ネットワーク（都市同郷団体）をとりあげて、その動向を解明していくことは、松本康が提示した課題の解決へ少しでも接近できるものと考えられる。

### 3 都市移住者の下位文化的実践

#### 3・1 兵庫県における自市町村出身者による都市同郷団体について

—— 鯉坂学の一九九五～一九九七年全国市区町村調査より ——

鯉坂学の一九九五～一九九七年全国市区町村調査（一九九八）によれば、都市同郷団体は、東京圏、次いで京阪神圏、名古屋の大都市圏、地方中枢都市圏、そして県庁所在地都市に集中して結成されていることが明らかにされている。したがって、大都市圏などにおいて都市同郷団体が集中して結成されているのは、C・S・フィッシャーが下位文化

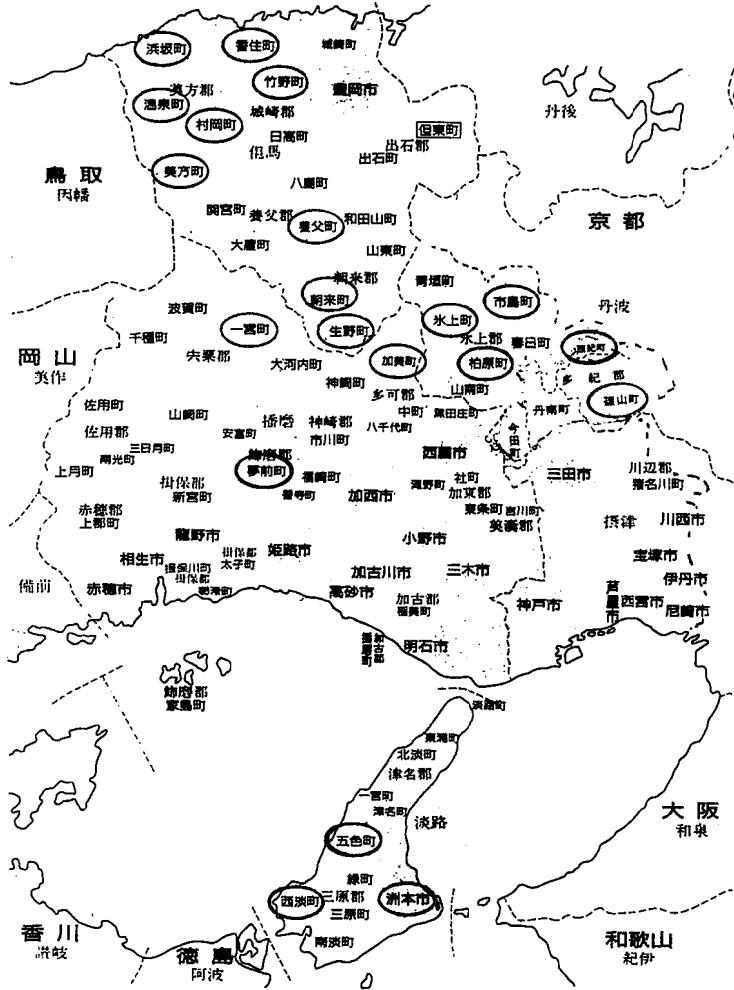


図1 自市町村出身の同郷団体が「有り」と回答した兵庫県の市町村（調査時点）の地域的分布（○で囲んだ市・町）

\*1975-1955年鯉坂学の全国調査により判明した自市町村出身者の同郷団体が「有り」と回答した兵庫県の市町村の地域的分布である。複数の市町村にまたがる出身者の都市同郷団体として、浜坂町と温泉町（東京圏）、柏原町と水上町（京阪神都市圏〈大阪府域〉）、柏原町と水上町、市島町（東京圏）、柏原町と市島町（京阪神都市圏〈関西域〉）、一宮町と五色町、西淡町（京阪神都市圏）、というように、それぞれ近隣地域にある自治体が重複した（同じ都市同郷団体）回答をよせている。また、本稿が事例としてあげる但東町出身の都市同郷団体は、自治体の回答が無回答であるために鯉坂調査では判明していない。そのことから、鯉坂の全国調査で判明した以上に同郷団体は存在していると言える。

表2 都市同郷団体はどの都市圏にあるか

(単位：%)

	東京圏	京阪神都市圏	都道府県庁所在地	総団体数
兵庫県市部	50.0%	50.0%		2
兵庫県町部	39.1%	56.5%	4.3%	23

表3 都市同郷団体はどの地域の出身者で結成されているか

(単位：%)

	市町全域	市町の一部	複数の市町 にまたがるもの	N. A	総団体数
兵庫県市部			100.0%		2
兵庫県町部	34.8%	17.4%	43.5%	4.3%	23

論で指摘するように、人口の集中性により下位文化を維持するのに十分な人口量（臨界量）に達しやすいためであると考えられる。

本稿は対象事例として、阪神都市圏において兵庫県出石郡但東町出身者により結成された阪神但東会をとりあげる。その前に、兵庫県二一市七〇町（調査時点）のうち一六市五四町自治体から回答を得た（回答率：市、七八・二％、町部、七七・一％）鰯坂学の一九九五～一九九七年全国市区町村調査のデータ（鰯坂学二〇〇一）から、兵庫県の自市町村出身者による都市同郷団体の現状を見ていくことにする。

兵庫県下において、自市町出身者により結成されている同郷団体は二五団体が判明している。団体が存在すると回答した二〇市町は島嶼部や農山漁村的地域に主に集中している（図1）。また、判明した同郷団体が結成されている所在地は、京阪神都市圏と東京圏に集中しており（表2）、京阪神都市圏の中でも、特に、大阪府下（五団体）、神戸市（四団体）に結成されている団体が多く見られる。

次に都市同郷団体が故郷のどのような地域的範囲の出身者によって結成されているかという構成基盤を見ると（表3）、回答が寄せられた団体のうち成員の出身地が複数の市町にまたがるもの（市部：一〇〇％、町部：四三・五％）が多く、町全域が三四・八％、町の一部が一七・四％となっている。

これは、鯉坂（一九九七）の指摘にもあるように「当該町村からの移住の指向されるパターンと移住者の量、移住者の移住先での居住形態（分散か集住かなど）」<sup>37</sup>との関係が有るように考えられる。また、出身者の地域的範囲は近隣の複数の市町出身者によるものが多く、その要因として次のことが考えられる。

まず、一九七〇年当時の兵庫県知事が、次のことを述べている。

兵庫県はかつて小藩、しかも分立、しかもその間に天領が交って居りまして、全体としてのまとまりという沿革的なものをもつて居りません。従つて今度は先々の小さな範囲に於ける集まりというものが割合に沢山ございまして、それらがお互いにこの郷土観念をもつて結び合っている。〔たんとう〕第5号、一七頁、一九七一年

このように兵庫県知事の述べていることや、都市部と農山漁村部において都市化の程度による生活様式などの差異により兵庫県という地域的範囲ではまとまりにくいと言える。<sup>38</sup>また、都市同郷団体が多く結成されている京阪神都市圏においては、距離も近接なことから県人会のようなものは結成されなかつたのであろう。そのことから、個々に近隣にあるいくつかの市や町の出身者が集まって、それぞれ県人会に代替するものを結成したように思われる。<sup>39</sup>

### 3・2 阪神但東会について

対象事例としてあげる阪神但東会は一九五五年以降、約二〇年間の高度経済成長が原動力となつて大都市化が進んだ第二次都市化の段階にある一九六六年に結成された都市同郷団体である。阪神但東会は兵庫県出石郡但東町出身者で、おおむね阪神地区に居住するものによつて組織されていた。<sup>40</sup>

会が結成されたことについて、長年、阪神但東会の世話役をしていたY氏（以下、氏名はYで表記）は次のように会

誌で述べている。

回顧すれば昭和四一年正月元旦（兵庫県ガンセンターに奉職の頃）郷土会設立の初夢にヒントを得て、本会の設立を提唱して同年七月神戸六甲荘で、設立発起人会（三四名）を開催、爾来、住所の調査や、郷土の町当局並に在阪神の町出身者の有志に相談大方の賛成を経て、翌四十二年二月十八日兵庫県中小企業労資センターにおいて創立総会を開催することができました。（『たんとう』第10号、二二頁、一九七六年）

会の目的として「本会は会員相互の融和親睦と郷土との緊密な連絡、協調をはかることを目的とする」ことをあげている。

会の活動として、

会員を中心として事務局の信頼を得るよう心掛けマンネリにならないよう、いつまでも魅力的な会となるよう各方面の意見を聞き、総会の開催、会誌の発行、縁談の紹介、婦人部、青年部への連絡、其他あらゆるよろず相談の外、郷土との相互共栄を図り、本会成功者の郷土への協力、又農協との経済提携（余裕金の郷土農協への預け入れ）  
筆者補注）等（『たんとう』第10号、二二頁、一九七六年）

を実現してきたということである。

また、阪神但東会が結成された当時の状況について、Y氏とともに発起人として会の設立に関わった一人（当時、県庁に勤務）が会誌で次のように述べている。

都市化社会における国内都市移住者の研究視座

昭和四十年の秋、県庁でY（五三か五四歳の頃Ⅱ筆者補注）さんと雑談している時、Yさんから「郷土会づくり」の話が出た。郷土会を作ることについては、私も賛成である。すでに神戸に居住する旧高橋村（一九五六年に但東町に合併Ⅱ筆者補注）出身の人達が『高橋会』を作っておられたのをうらやましく思っていた私は『合橋会（旧合橋村も一九五六年に但東町に合併Ⅱ筆者補注）』でも作るのかと思っていたのだ。（前掲書、三五頁、一九七六年）

このように、阪神但東会が結成された高度経済成長期において、他にも都市移住者により都市同郷団体がつくられていたことがうかがえる。そのことは、松本通晴（一九九四）の全国調査において回答が寄せられたもののうち、一九四六年から七四年に結成された同郷団体が全体の五三・七%を占めていたことが分かる報告からも例証できることである。

### 3・3 阪神但東会の動向

この節では、阪神但東会の動向を見ていくことにする。阪神但東会は当初、法人として事業団体へ展開させていくことを目標として考えられていた。そのために、会の収入源として会員相互の頼母講や金融業などの事業が提案されていたということである。つまり、「大阪主婦の会が月十円の会費で今立派な主婦会館を建て、神戸の灘生活協同組合が組合出資で成功し、創価学会が団結の力で成功されているように」（『たんとう』第4号、一三七頁、一九七〇年）、移住先の都市において、同郷を基盤とした社会的ネットワークを展開させようとしていた動向が阪神但東会において垣間見られるのである。会員数（普通会費納入者）の動向を見ると、一九六八年（一六九名）、一九七〇年（二〇〇名）、一九七四年（二七五名）と増えている。

次に、会員の職業構成（表4―1）や家族構成（表4―2）を見て行くことにする。「本会は他の郷土会のような、

表 4-1 阪神但東会会員の職業構成（1970年時点）

NO (会員)	職 業	居住地	出身地 (集落)	普通会費 納入回数
1	兵庫県住宅団地サービスセンター	大阪市城東区	水石	2
2	(株)ニチエイ	高石市	水石	1
3	牛乳販売店	豊中市	水石	1
4	大江商店	大阪市旭区	水石	1
5	神戸屋兵庫店	神戸市兵庫区	水石	1
6	神戸屋本店	神戸市生田区	水石	1
7	西村運送店	大阪市旭区	水石	1
8	出石屋本店	大阪市大淀区	畑	1
9	井上茶店	大阪市城東区	畑	1
10	大石小児科医院	神戸市須磨区	矢根	1
11	但屋合資会社	神戸市長田区	矢根	2
12	主婦	三田市	矢根	2
13	雪御所温泉	神戸市兵庫区	矢根	1
14	日本ペイント(株)	明石市	矢根	1
15	関西電尼崎第二発電所	尼崎市	矢根	1
16	主婦	西宮市	矢根	1
17	主婦	伊丹市	矢根	1
18	兵庫県警行政処分課	姫路市	奥矢根	1
19	主婦	豊中市	奥矢根	1
20	万年堂(文具)	大阪市都島区	出合市場	2
21	横山合金所	堺市	出合市場	1
22		大阪市東淀川区	出合市場	1
23	久保田鉄工(株)	大阪市城東区	日殿	1
24	学習研究教室	尼崎市	河本	1
25	兵庫県庁統計課	三木市	河本	1
26	貝原鉄工所	東大阪市	河本	2
27	本山第一小学校	神戸市灘区	河本	2
28	芦屋警察署	神戸市東灘区	河本	1
29	葺合中学校	神戸市東灘区	河本	1
30	広田電化サービス	大阪市西成区	河本	1
31	主婦	大阪市東淀川区	河本	1
32	広告美術タケダ	神戸市兵庫区	河本	1
33	千原総本店	茨木市	西谷	1
34	料理スタンド	大阪市天王寺区	西谷	1
35	ひかり電機(株)	大阪市東住吉区	西谷	2
36	住友金属工業(株)	尼崎市	西谷	1

NO (会員)	職 業	居住地	出身地 (集落)	普通会費 納入回数
37	サンケイ新聞大阪本社	神戸市東灘区	西谷	1
38	大信産業(株)	堺市	西谷	1
39		高槻市	西谷	1
40	主婦	明石市	西谷	1
41	土井工業所	大阪市大正区	西谷	1
42		神戸市兵庫区	天谷	2
43	三ツ木製作所	摂津市	天谷	1
44	柴山ハンカチーフ	大阪市都島区	天谷	1
45	力餅食堂	大阪市東住吉区	天谷	1
46	ミシン販売	堺市	佐々木	1
47	天満警察署	大阪市都島区	佐々木	1
48		吹田市	相田	1
49	指圧師	神戸市兵庫区	相田	2
50	志水医院	神戸市長田区	相田	1
51	三菱電機伊丹製作所	伊丹市	相田	1
52	宮島医院	神戸市長田区	小谷	1
53	兵庫県警自動車部隊	明石市	小谷	1
54		大阪市都島区	小谷	1
55	茨木安威小学校	茨木市	小谷	1
56	サカモト寝具店	大阪市生野区	小谷	1
57	洋服販売	寝屋川市	小谷	1
58	野江幼稚園	大阪市阿倍野区	南尾	2
59		大阪市城東区	出合	2
60	村尾ベビー(株)	大阪市都島区	出合	2
61	主婦	神戸市兵庫区	三原	1
62	村尾ベビー(株)	大阪市都島区	三原	1
63	今村病院	芦屋市	唐川	2
64	太田製鎖所	大阪市生野区	唐川	1
65	末吉部品(株)	大阪市城東区	唐川	1
66	池田電報電話局	豊中市	唐川	1
67		西宮市	唐川	1
68	渋谷工業(株)〈会社役員〉	西宮市	中山	1
69	千笠屋	大阪市北区	中山	2
70	渡辺一良商店〈役員〉	吹田市	中山	2
71	主婦	尼崎市	中山	2
72	煙草店	尼崎市	中山	2
73	松原酒店	尼崎市	中山	2



NO (会員)	職 業	居住地	出身地 (集落)	普通会費 納入回数
74	吉田鉄工所	大阪市東成区	中山	2
75	自営	大阪市都島区	中山	1
76	自由民主党神戸支部	神戸市須磨区	中山	1
77	神戸多聞台小学校	神戸市兵庫区	中山	1
78	堀書店	大阪市北区	中山	1
79	神戸室内小学校	神戸市兵庫区	中山	1
80	日本シエラック工業	伊丹市	中山	1
81	岩田建具店	門真市	中山	1
82	昭和アルミ(株)堺工場	堺市	虫生	1
83	旭洋ビル(株)	西宮市	虫生	1
84		伊丹市	虫生	1
85	志水医院	神戸市長田区	虫生	1
86		神戸市長田区	坂野	1
87	日本万国博覧会協会	高槻市	坂野	2
88	電気器具店	大阪市北区	坂野	1
89	三菱電機(株)	神戸市垂水区	坂野	1
90	ロック製作所	大東市	坂野	1
91	主婦	大阪市阿倍野区	坂野	1
92	主婦	大阪市城東区	坂野	1
93	日本ペイント(株)	芦屋市	口藤	1
94	尼崎健康幼稚園	神戸市長田区	口藤	2
95	帝国酸素(株)尼崎工場	尼崎市	口藤	1
96	岡本助産院	大阪市阿倍野区	口藤	1
97	いづみ屋質舗	大阪市西成区	中藤	1
98	松葉書店	大阪市浪速区	中藤	1
99	丸福鉄工所	大阪市浪速区	中藤	1
100	不動産融資(株)〈役員〉	神戸市葦合区	奥藤	2
101	富士火災海上保険(株)	東大阪市	奥藤	2
102		神戸市葦合区	奥藤	1
103	塩谷食品(株)	大阪市大淀区	奥藤	1
104	三菱重工業神戸造船所	神戸市東灘区	奥赤	1
105	東亜自動車(株)	神戸市兵庫区	奥赤	1
106	丸佐商事(株)	堺市	赤花	1
107	藤原冷機(株)	東大阪市	赤花	1
108	三幸食品(株)	大阪市都島区	坂津	1
109	三共生興(株)大阪支店	豊中市	坂津	1
110	鹿島建設 大阪支店	大阪市住吉区	畑山	1

NO (会員)	職 業	居住地	出身地 (集落)	普通会費 納入回数
111	永井歯科医院	神戸市兵庫区	畑山	2
112	田山(株)加悦谷出張所	枚方市	畑山	1
113	県立宝塚高校	伊丹市	畑山	1
114	西宮商工会議所	西宮市	畑山	1
115	田村金属製作所	門真市	畑山	1
116		神戸市兵庫区	日向	1
117	主婦	大阪市浪速区	日向	1
118	清水建設大阪支店	西宮市	東里	1
119	塩川会計事務所	大阪市城東区	木村	1
120	大阪海上保安監部	大阪市港区	木村	2
121		神戸市東灘区	木村	1
122	阪神道路公団	神戸市葺合区	太田	2
123		神戸市長田区	太田	1
124	松原発電モーター(株)	大阪市生野区	太田	2
125	国鉄	東大阪市	太田	1
126	今井工務店	豊中市	西野々	1
127	三菱電機通信製作	伊丹市	西野々	1
128	二ツ茶屋	神戸市灘区	西野々	1
129	大阪警察病院	大阪市天王寺区	高竜寺	1
130	京都都市管理部	吹田市	高竜寺	1
131	神戸葺合高校	神戸市須磨区	正法寺	2
132	数森産機工業(株)	尼崎市	正法寺	1
133		大阪市住吉区	正法寺	2
134		守口市	正法寺	2
135		富田林市	正法寺	1
136		神戸市長田区	正法寺	1
137	関西ヨコハマタイヤ(株)	堺市	正法寺	1
138		大阪市城東区	正法寺	1
139	神戸女学院	西宮市	平田	1
140	三菱神戸病院	神戸市長田区	平田	1
141	兵庫トヨタ自動車販売(株)	神戸市長田区	平田	1
142	左官	神戸市須磨区	平田	1
143	伊丹警察署	神戸市葺合区	平田	1
144	阿倍野研究所	大阪市阿倍野区	平田	1
145	椿本チェーン製作所	大阪市城東区	平田	1
146	田中電機工作所	大阪市住吉区	平田	1
147	菓子卸商	守口市	平田	2

NO (会員)	職 業	居住地	出身地 (集落)	普通会費 納入回数
148	神戸長峰中学校	神戸市葺合区	平田	2
149	神港建設興業(株)	神戸市兵庫区	栗尾	1
150	菓子商	西宮市	栗尾	1
151	尼崎塚口小学校	伊丹市	栗尾	1
152	ミスジ商事大阪営業所	寝屋川市	栗尾	1
153	大阪特殊車両(株)	大阪市城東区	栗尾	1
154	丸円無線(株)	大阪市浪速区	栗尾	1
155	大日電線(株)	尼崎市	栗尾	1
156	兵庫県警厚生課	神戸市兵庫区	佐田	1
157	大阪酒元事務所	神戸市兵庫区	佐田	1
158	清水酒店	大阪市西成区	佐田	2
159	兵庫県庁管財課	神戸市灘区	佐田	1
160	東京興信所関西支所	吹田市	佐田	1
161	横谷商店	神戸市東灘区	佐田	2
162	兵庫県庁援護課	明石市	佐田	1
163	兵庫県交通安全協会	神戸市長田区	久畑	1
164	加西警察署	加西市	久畑	1
165	兵庫県解放県連合会	宝塚市	久畑	1
166	兵庫県教委阪神出張所	西宮市	久畑	1
167	広嘉電気製作所	大阪市北区	久畑	2
168	広嘉電気製作所	大阪市東淀川区	久畑	2
169	みゆき商店	神戸市生田区	久畑	1
170	百万両酒造(株)	神戸市東灘区	久畑	1
171	コヤマカメラ	神戸市生田区	久畑	1
172	神戸拘置所	神戸市生田区	久畑	1
173	阪神変圧器製作所	神戸市灘区	久畑	2
174	小山電気(株)	堺市	久畑	1
175	テーエス運輸(株)	尼崎市	久畑	1
176		明石市	久畑	2
177	国鉄吹田操車場駅	大阪府泉南郡	久畑	1
178	大金製作所	寝屋川市	久畑	1
179	淡路警察署	大阪市都島区	久畑	1
180	酪農業	三田市	久畑	1
181	主婦	宝塚市	久畑	1
182	堂島中町ビル機会室	宝塚市	久畑	1
183	三菱重工神戸造船所	神戸市兵庫区	久畑	1
184	ミドリ電化社	西宮市	久畑	1

NO (会員)	職 業	居住地	出身地 (集落)	普通会費 納入回数
185	たじまや呉服店	神戸市葺合区	久畑	1
186	主婦	高槻市	久畑	1
187	堺税務署	吹田市	久畑	1
188		神戸市長田区	久畑	1
189	タチバナ薬局	神戸市兵庫区	後	2
190		大阪市旭区	後	2
191	田尻町役場	大阪府泉南郡	東中	1
192	湯浅電池(株)	高槻市	東中	1
193	主婦	尼崎市	東中	1
194	阪急百貨店	尼崎市	東中	1
195	果物商	大阪市城東区	小坂	1
196	後電設工事店	加古川市	小坂	1
197	三菱重工神戸造船所	神戸市兵庫区	小坂	1
198	炳昌洋装店	神戸市生田区	小坂	1
199	光陽化成工業所	八尾市	大河内	2
200	稲木刷子工業(株)	八尾市	大河内	1
201		大阪市城東区	大河内	1
202	和裁師	吹田市	大河内	1
203	芦田製作所	高槻市	大河内	2
204	河田ゴム(株)	神戸市垂水区	大河内	1
205		大阪市此花区	大河内	1
206		西宮市	大河内	1
207		神戸市東灘区	大河内	1
208	呉服弘橋屋	大阪市西区	大河内	1
209	千匹屋	高槻市	大河内	1
210	兵庫県経済連	神戸市灘区	薬王寺	1
211	山本昌(株)	神戸市長田区	薬王寺	1
212		神戸市灘区	薬王寺	1
213		伊丹市	薬王寺	1
214	親睦工務店	東大阪市	薬王寺	1
215	大月工務店	守口市	薬王寺	1
216	神戸本庄中学校	明石市	薬王寺	1
217	関西労災病院	尼崎市	薬王寺	1

\* 空欄は不明。

表4-2 阪神但東会会員の家族構成（1970年時点判明分）

NO	続柄	年齢	勤務先	NO	続柄	年齢	勤務先		
1	世帯主	58	兵庫県住宅団地サービスセンター	9	世帯主	37	渡辺商店役員		
	妻	58	家事		妻	33	家事		
	長女	36	大阪府立三国丘高校教諭		長男	9	小学生		
	長女	34	茶華道師範	次男	7	小学生			
	三女	31	神戸市立丸山中学校教諭	10	世帯主	38	書籍商		
	三女	29	豊中市立第四中学校教諭		妻	32	家事		
	二女	35	農業（本籍において）		長女	9	小学生		
二女	32	家事（本籍において）	長男		8	小学生			
2	世帯主	56	公衆浴場主	11	世帯主	66	鹿島建設大阪支店		
	妻	48	家事		妻	59	家事		
	長男	26	神戸商大勤務		長男	29	鹿島建設大阪支店		
	次男	24	姫路工大卒		長女	35	大阪大学微研 アメリカ留学中		
	次女	21	山手短大勤務		長女	33	アメリカ在住		
3	世帯主	51	阪神相互銀行伊丹支店 三和銀行大阪駅前支店 日本生命本社	二女	28	第一製薬広島支店			
	長男	26		二女	25	家事			
	長女	24		12	世帯主	62	永井歯科医院主		
	次女	21			妻	58	家事		
4	世帯主	66	学習塾	二女	27	婚約中			
	妻	63	家事	三女	24	東灘小学校教諭			
	三女	29	島の内洋裁学院	長男	35	歯科医師			
	四女	27	兵庫相互銀行大阪支店	長男妻	32	家事			
	三男	22	関西学院大学在学	次男	32	歯科医師			
5	世帯主	47	兵庫県庁統計課	次男妻	30	家事			
	妻	39	家事	長女	38	(株)日本ホビン 重役			
	長男	16	三木高校生	長女	30	家事			
	次男	14	三木中学生	13	世帯主	33	西宮商工会議所		
	長女	12	三木小学生		妻	29	家事		
6	世帯主	86	国鉄吹田工場経理課	長女	2	14	世帯主	59	(株)田山 加悦谷出張所
	妻		家事	長男	30		(株)大阪ガラス		
	長女		高校三年	次男	22		高級飲食店		
7	世帯主	63	会社役員	三男	19	(株)小橋金属			
	妻	54	家事	次女	15	中学生			
	次男	23	大阪工大在学	15	世帯主	50	不動産融資(株)役員		
	次女	22	家事		妻	41	家事		
8	世帯主	46	(株)フジヤ	養女	20	兵庫県くみあい飼料会社			
	妻	40	渋谷商店	16	世帯主	30	清水建設大阪支店		
	長女	14	中学生		妻	35	家事		
	次女	13	中学生	長女	1	17	世帯主	40	大阪海上保安監部
	長男	9	小学生	妻	40		家事		
	母	71	日本国内航空	長男	13		中学生		
	甥	23	北野高校生						
甥	19	北野高校生							

都市化社会における国内都市移住者の研究視座

NO	続柄	年齢	勤務先
18	世帯主	54	神戸海上保安部巡視艇みねゆき
	妻	45	兵庫県がんセンター
	長男	23	(株)日本製麻 加古川工場
	次男	21	兵庫県日野自動車 灘サービスセンター
	長女	18	県立兵庫工業高校
19	世帯主	41	生田警察署
	妻	30	神戸将軍通郵便局
20	世帯主	58	神戸女学院
	妻	50	家事
	長男	21	姫路工大在学
	長女	27	会社員
	次女	23	1969, 11, 結婚
21	世帯主	54	栗原ふとん店主
	妻	49	栗原ふとん店主
	長男	24	会社員
	長女	22	家事手伝
	二女	19	短大在学
22	世帯主	54	県警兵庫寮々長
	妻	48	寮母
	長男	27	(株)日本ペイント寝屋川研究所
	次男	22	(株)兵庫日産西宮営業所技術部
	次女	20	大阪安宅産業
	長女夫	31	(株)大阪印刷貿易 技術部
	長女	25	家事
23	世帯主	63	神戸拘置所
	妻	64	家事
	次女	35	(株)ミドリ十字
	三女	30	松陰女子学園
24	世帯主	54	南海電鉄天下茶屋工場
	妻	44	家事
	長男	24	(株)菱電商事
	長女	22	住友銀行岸和田支店
	次女	19	八幡製鉄堺工場
25	世帯主	53	みゆき商店主
	妻	51	みゆき商店主
	長女	28	みゆき商店主
	長男	27	みゆき商店主
	次男	25	大阪航空保安事務所
26	世帯主	56	タチバナ薬局主
	妻	56	家事
	長男	21	明治薬科大学在学
次男	19	昭和大学在学	

NO	続柄	年齢	勤務先
27	世帯主	65	会社員
	妻	50	家事
	長男	35	
	次女	19	信愛高校生
28	世帯主		田尻町役場
	妻		家事
29	世帯主	42	泉南地方事務所
	妻	38	家事
	長男	15	大阪学院大学高校生
	長女	12	城南学園中学生
	次女	8	市立今川小学生
	母	57	家事
30	世帯主	55	家事
	妻	47	古谷商店事務員
	次女	20	市立東商高生
	三女	17	
31	世帯主	31	千匹屋呉服店主
	妻	29	家事
	長男	3	
32	世帯主	68	(株)広告商事
	妻	64	
	長女	27	(株)北田スケール 家事
33	世帯主	45	(株)朝日金属精工
	妻	41	家事
	長男	19	大商薬品営業部
34	世帯主	57	市立葺合高校
	妻	51	家事
	長女夫	30	神戸東住吉中学校
	長女	28	神戸鴨越小学校
	長男	26	東京日本経営教育センター
	長男妻	24	神戸若宮小学校

\* 空欄は不明

老人や成功者や金持だけの会ではなく、これ等先輩者の指導と助言を受けて、若い人も交えて、郷土人但東町という心のふれ合いから血の通った会への成長」〔たんとう〕第4号、一三七頁、一九七〇年〕を達したいことから、会員の対象として職業、性別、年齢などを問わないとしている。そのことから、阪神但東会は会社経営者や専門職、勤務者層、自営業者層、主婦など但東町出身の様々な階級・階層の会員から構成されていることが分かる。つまり、これまでの研究において、都市同郷団体の主な構成員として都市における現業労働や都市自営業への参入者（岡橋秀典一九八七、松本・丸木編一九九四、湯浅俊郎一九九九、二〇〇〇）があげられていた。しかし、本稿の対象事例においては、都市同郷団体の構成員の属性は多様な階級・階層から成っていることが分かる。

会の活動として、会員の親睦を深めるための年一回の総会と会誌の発行が二大事業としてあり、会員（普通会費納入者）の弔慰もおこなっていた。総会には、但東町長や議長等、故郷の小・中学校の先生も招待し阪神地区で盛大に開いていたということである。その総会では、同郷者の喜寿、成人式の祝意や、同郷の芸能人を呼んで余興などもおこなわれていた。

また、組織を充実させるために、阪神地区に居住する全但東町出身者を、会誌での呼びかけや但東町役場、故郷の学校関係などを通して調査している。そして、在住地が判明した但東町出身者については会誌に載せている出身者名簿に掲載し、経費の許す範囲内で、判明した全但東町出身者へ会誌を郵送するようにしていた（一九六七年に創立総会が開かれた時の判明者は三四〇名であったが最終的には阪神地区で二〇〇名ほど判明したという）。会誌『たんとう』は年に一回、発行されている。会誌の発行と郵送は、会誌を郵送した会員の中から会費を送ってきてくれる人の分と会員有志からの広告費で経費を捻出し、編集や発送などの作業は、Y氏を中心とする会員の献身的奉仕によっておこなわれた。発送された会誌の部数であるが、唯一分かるのが一九六九年に発行された『たんとう』第3号についてである。その発送部数は、但東町出身者へ一二五〇部発送され、故郷へ四〇〇部発送されたということである。

それでは、会の実際の活動を会誌から見えて行くことにする。資料5を見ると、縁談紹介が、かなりのスペースを割いておこなわれている。その縁談紹介は、初婚だけでなく、離婚した方、された方、未亡人なども紹介する対象としている。縁談紹介の「嫁が欲しい」「嫁入したい」の欄においては、生年月日、学歴、職業、在住地などの申込者の履歴や、なかには相手の年齢などの希望も紹介されている。養子や求人案内（就職）もおこなわれ、会員の情報が交換されていたことが分かる。

阪神但東会の活動の中でも縁談紹介については、会誌おいて次のような会員の投稿記事がある。

私の長女も早や適齢期となりましたので、そろそろ良縁をとという親としての願いから親せきはいうに及ばず、上司、同僚友人等数多くの方々に対して良い方があればご紹介をいただきたいとお願いしたところ、たくさんの方からこの方ならご紹介下さいまして本当に有難く感謝しておる次第であります。ご紹介いただいた方はそれぞれ立派な方ばかりで、ふつつかな私の娘には、もつたいない方ばかりでしたが、中々本人が首を縦に振ってくれませんでした。たまたまこの方ならと娘が承知してくれました方からは、先方からおことわりがあるといった次第で、妻も次第に心労を深めて参りました。……『一度、釣書を持って但東会のお世話をいただいている山本さんの御宅にお伺いしては』という妻の言葉に早速次の週にお願いに上ったのです。……（Y氏から紹介され、II筆者補注）お預かりした写真・書類を持ち帰り妻に見せましたところ大変乗気です。勤めを終えて帰って参りました娘に見せましたと何とこれまで数々のお話にも首を縦に振ってくれなかつた娘が一度お会いしたいというではありませんか。それならと早速妻と同道で山本さんにご紹介いただきたいとお願ひにあがった次第でした。日を改めて、お見合いそして交際となり、こぶし固め、結納、挙式の日取り決定とその後はとんとんと話が進行しました。（「たんとう」第9



このような経緯について、この記事の投稿者は「同郷という親しみ、懐かしさ、安心感といったものが先様にも、娘にも作用して話がまとまったものと思います」(「たんと」第9号、三五頁、一九七五年)と述べている。

つまり、都市同郷団体の機能・役割として先行研究(松本・丸木編一九九四、鱒坂一九九五、一九九七等)において言及されているように、「阪神但東会においても、活動として縁談紹介の他に就職斡旋などもおこなわれていた。その中で、対象事例においては特に縁談紹介を通して、高度経済成長長期に、都市移住者が世帯形成をし都市社会に定着していく援助の機能・役割を阪神但東会(都市同郷団体)が担っていたことが分かる。また、縁談紹介の申込者には、高等学歴を有する人や、小学校、中学校の教諭、保健婦などの専門的職業の勤務者などが見られる。これまでの研究においては、主に農村出身の現業労働者層(労働者階級)や自営業者層(旧中間層)などの都市移住者の適応組織として都市同郷団体が捉えられた傾向にあった。しかし、対象事例から、都市化社会(Urbanizing Society)において、同郷を基盤とした社会的ネットワーク(都市同郷団体)は、農村出身のホワイトカラーの勤務者層(新中間層)においても、その援助の機能・役割を果たしていたことが垣間見られる。

次に、出身地とのつながりを見てみると、会誌には故郷である但東町の近況についても書かれている。会誌は、但東町の町会議員、各区長、各農事部長、各婦人会長、各隣保(隣保内各戸回覧用)や町農協、教育関係、診療所医院、駐在所、青年団などへも配付している。また、但東町は過疎化の状況にあったために、会誌には但東町の開発についての記事を載せていることから、それを但東町の行政官庁である兵庫県庁の首脳部へも配付したということである。Y氏と県の開発調整課長とのつながりもあるが、会誌の成果の一つとして故郷の発展において会誌『たんと』のとりもつ縁で、故郷の高峰である床尾山開発のための兵庫県観光課と開発調整課の幹部各位による実地調査をうけることが実現したということである。

阪神但東会は結成後、「昭和四五年第四回総会には、早くも時の兵庫県知事金井元彦氏(現参議院議員)の御臨席を得

るまでに成長し、十年目の現在、約二十万円の農協貯金が実現したのであります」〔たんとう〕第10号、三五頁、一九七六年〕というように展開していったのである。

岡橋秀典は同郷団体について「これらの会の設立、維持運営には、会長を始めとする役員・世話人の奉仕的活動が重要な役割を果たしていることが多い。同郷団体の形成・存続は、一定の同郷者の人口集積を前提としながらも、こうした人的要素に左右される面が<sup>⑧</sup>あろう」と指摘している。この岡橋の指摘のように、代表幹事として長年、リーダーシップをとってきたY氏が不在（一九七六年二月死去）となると、阪神但東会は大阪地区（大阪但東会）と神戸地区（神戸但東会）に分かれる。その後の但東町出身者の都市同郷団体の動向を見るために、阪神但東会（資料6—1）と大阪但東会（資料6—2）の会誌を見比べてみると、大阪但東会の会誌においては縁談紹介や求人案内等を行う、生活よろず相談と案内<sup>⑨</sup>がおこなわれなくなっている。つまり、但東町出身者による都市同郷団体の機能・役割は、手段的（instrumental）な意見合いよりも、次第に親睦中心の表出的（expressive）な側面が強くなっていく動向にある<sup>⑩</sup>。

## おわりに

一九六九年に国民生活審議会により『コミュニティー生活の場における人間性の回復』が公にされているように、高度経済成長期において、地域社会における生活問題が噴出し伝統的なマチ・ムラが解体していくことが問題視された。そのような都市の状況下において、国内都市移住者により結成された阪神但東会の当初の目標は次のことであつた。それは、当時、移住先において形成されていた大阪主婦の会や、神戸の灘生活協同組合、創価学会などの都市的な社会的ネットワークが展開をしていた中で、都市移住者のムラ的な同郷を基盤とした社会的ネットワークを同じように発展させることであつた。

阪神但東会の実際の活動状況を見ると、移住先の都市においては縁談紹介を中心に、その社会的ネットワークは機能・役割を果たしていたことが会誌から見られる。そのことから、都市形成過程において、都市同郷団体によって、都市移住者の都市への定着化が促進されたことがうかがえる。また、都市化社会 (Urbanizing Society) において、同郷を基盤とした社会的ネットワークは、これまで言及されていた農村出身の労働者階級や旧中間層だけでなく農村出身の新中間層も含んで多様な階級・階層の都市移住者にまで、その適応組織としての機能・役割を果たしていたと言える。

出身地とのつながりをみると、対象事例において、その同郷を基盤とした社会的ネットワークにおいては次のようなことが見られた。それは、過疎化していく故郷の発展という問題に対して、出身地における農協との経済提携など、会誌の発行を通じて社会的動員があった。また、会誌を配布することによって、京阪神の人々や、兵庫県庁の職員などに故郷である但東町への認識を深めることが意図されていたのである。

このような都市移住者の動向は、L・ワースが指摘する第二次的接触の優位や社会解体などのアーバニズムの諸側面が一定の機会―制約となった都市移住者の「下位文化的実践」(松本 一九九五) であると捉えられる。

つまり、対象としてとりあげた都市移住者の動向から次のことが分かる。阪神但東会が結成された当時、都市は大衆社会的状況にあった。そのような状況において、先行研究においてとりあげられてきた農村出身の現業労働者層や自営業者層は都市生活に適応していくことにおいて困難をとめない、同郷者同志の結婚もよく見られた。<sup>40</sup> それは、困難の程度は異なるであろうが、方言、慣習・習俗、行為の様式としての文化における出身地域と移住先との差異など農村出身のホワイトカラーの勤務者層においても移住先の都市生活の適応において困難をとまなかったと考えられる。そのことは、阪神但東会において都市移住者の「下位文化的実践」として、縁談紹介が活発に行われていたことから察することができる。その都市移住者の「下位文化的実践」が、都市化社会 (Urbanizing Society) において、農村出身者の都市への定着を、ある程度促進させたと捉えられる。したがって、都市同郷団体は都市の社会関係に影響を与えていることが

指摘できる。

これまでの研究動向において都市社会を捉えていくのにL・ワースが指摘するような都市化における社会解体の側面が強調される傾向が見られた。そのことにより、「コミュニティ」の形成、町内会・自治会などの都市地域住民組織のありかたや、その可能性に焦点があてられることになったと考えられる。しかし、現実の都市化過程において、一方でこれまでの研究動向において焦点があてられてきたL・ワースが指摘するアーバンイズムの諸側面が溢れ出るとともに、他方では都市同郷団体のように同郷を基盤としたある種の第一次的な関係が一定の機能・役割を果たしている。

そのことから、都市同郷団体（国内都市移住者）を視点にすると、都市移住者の移住先における都市生活への適応の動向を分析していくことから、歴史的に日本の都市地域社会の形成過程が明確にできる視座がひらかれると考えられる。しかし、今後、都市同郷団体の全貌を捉えていくのに、その各団体の機能や組織化の程度においてヴァリエーションがあることは、整理していかなければならない課題である。また、現代の都市地域社会を考えると、都市同郷団体を結成するという国内都市移住者の動向は、エスニシティの動向と響きあうものがあり、比較・検討しながら両者の差異を捉えて位置づけることが肝要である。

注

- (1) ただし、ここで対象としている都市同郷団体は市町村やそれよりも狭域の地域（例えば旧行政村や自然村などの集落）の出身者によって構成されている団体である。また、都市同郷団体（同郷会）は海外でも研究されており、インドネシアの事例として加藤剛の「都市と移住民：ジャカルタ在住ミナンカバウの事例」『東南アジア研究』第二二巻、四七〜六一頁、一九八三年。や「インドネシアの都市人類学／インドネシアの都市における種族結合：ネットワークと同郷会」『東南アジア研究』第二三巻、三九一〜四一七頁、一九八六年。エジプトの事例として店田廣文「エジプトの都市社会」早稲田大学出版、一九九九年。等がある。また、アフリカの事例として松田素二「都市を飼ひ慣らす」河出書房新書、一九九六年。などがある。

- (2) 黒田俊彦「日本人口の構造転換〔増補版〕」古今書院、二〇〇頁、一九七九年。

- (3) 柳田國男『都市と農村』『柳田國男全集 29』ちくま文庫、三三九頁、「一九二九年」一九九一年。
- (4) 鈴木栄太郎、「一九五七」一九六九、『鈴木栄太郎著作集VI 都市社会学原理』未來社、一三八〜一三九頁、「一九五七年」一九六九年。
- (5) 似田貝は、コミュニティ形成の「具体的可能態」をさぐる作業として住民運動研究が位置づけられていることに対して、次のような問題提起をする。「住民運動の社会学的規定を『体制』についてなにかがおかしいという素朴な疑問、批判を起点として、個人問題と地域問題とを総体としてとらえ、解決しようとする住民の思想と行動」(圈点、引用者、傍点、筆者)とし、こうした内容の住民運動を「価値指向型運動」へと収斂させてしまうことに問題がある」(似田貝香門・松原治郎編『住民運動の論理』、七頁、一九七六年)とする。したがって「研究の方法においては、そもそも何故、特殊なイッシュヌー自体が、また運動の展開による「イッシュヌー総体」が、地域社会で顕在化してこざるをえないのか、を解明することこそが、コミュニティ(そう呼びたければ)研究者における住民運動研究の任務であろう」(前掲書、七頁、一九七六年)とする。そのことから、「コミュニティ研究(我々は「コミュニティ」なる用語は特殊に限定された理念型としては利用するが、分析対象としてはこれまた曖昧ではあるが地域社会なる用語の方がまだよいと思っている)の、一つの方法として、現実に起こっている住民運動を認識的媒介に、「地域」の総体的把握を迫っていくものとして住民運動の位置づけがあるはずである」(前掲書、七頁、一九七六年)としている。
- (6) 松原治郎・似田貝香門編『住民運動の論理』学陽書房、二二八頁、一九七六年。
- (7) 前掲書、二一四頁。
- (8) 町村敬志「グローバル化と都市 なぜイラン人は「たまり場」をつくったのか」奥田道大編『講座社会学 4 都市』東京大学出版会、一六五頁、一九九九年。
- (9) 岩崎・鯉坂・上田・高木・広原・吉原編『町内会の研究』御茶の水書房、四七三頁、一九八九年。
- (10) 岩崎・鯉坂・上田・高木・広原・吉原編『前掲書 御茶の水書房、四七七頁、一九八九年。』
- (11) 玉野和志『近代日本の都市化と町内会の成立』行人社、二七八頁、一九九三年。
- (12) 前掲書、二七八頁。
- (13) 前掲書、二八二頁。
- (14) 中田實『地域共同管理の現在』東信堂、一七頁、一九九八年。

都市化社会における国内都市移住者の研究視座

- (15) 町村敬志 前掲論文、一六五頁。
- (16) Wirth, L., "Urbanism as a Way of Life," *American Journal of Sociology* 44, 1938, pp. 12-3.
- (17) Gans, H. J., *THE URBAN VILLAGERS Group and Class in the Life of Italian Americans UPDATED AND EXPANDED EDITION*, THE FREE PRESS, 1982, p. 210.
- (18) *Ibid.*, p. 199.
- (19) イタリヤ系移民の2世から3世になると、ホワイトカラーの技術職(実際には、熟練労働者)に就く人が出始めたり、サービス業(特に販売業)に就く人が出てくるといふことである。
- (20) Gans, H. J., "Urbanism and Suburbanism as Ways of Life: A Reevaluation of Definitions," in A. M. Rose, ed., *Human Behavior and Social Processes: An Interactionist Approach*, Boston, 1962, p. 644.
- (21) Fischer, C. S., "20 th-Year Assessment of Subculture Theory of Urbanism," *American Journal of Sociology* 101, 1995, p. 544.
- (22) *Ibid.*, p. 544.
- (23) Fischer, C. S., "Toward a Subcultural Theory of Urbanism," *American Journal of Sociology* 80, 1975, p. 1324.
- (24) *Ibid.*, 1975, p. 1324.
- (25) *Ibid.*, 1975, p. 1326.
- (26) *Ibid.*, 1975, p. 1328.
- (27) *Ibid.*, 1975, p. 1329.
- (28) C・S・フィシャーは下位文化論の分析のレベル(コミュニティ(communities)か個々(individuals))において混乱があり、個人に関しての調査は有益であるが、下位文化理論の検証は場所レベル(place-level)にあるという。また、特に地域の立地条件などのように外因的なものである変数と、経済的条件などではなくアーバンニズムそのものの効果を指し示す内発的な変数を区別して、より正式な理論をつくる必要があるとしている。
- (29) *Ibid.*, 1995, p. 568.
- (30) 鯉坂学「都市同郷団体の現状―甲信越地方出身者を対象として―」同志社大学人文学会『評論・社会科学』第56号、一九九七年、一八頁。
- (31) 松本康「都市社会の構造変容 都市社会―空間構造と社会的ネットワーク」奥田道大編『講座社会学』4 都市』東京大学

出版会、一五〇頁、一九九九年。

(32) 前掲論文、一五一頁。

(33) 松本通晴「都市の同郷団体の性格」『京都市政調査会報』第68号、京都市政調査会、四〇五頁、一九八七年。

(34) 鯉坂学 前掲論文、四頁、一九九七年。

(35) 祖父江孝男(一九七二)は東京において、大阪、京都、兵庫の三府県が県人会を持っていないことについて「これらの府県には都市化した地域が多く、したがってもの考え方も大幅に個人主義化してしまい、それに第一、職業の種類も千差万別となつて、同郷人同士がそれほど親近感を持たず、互いに顔を合わせあおうなどという気持ちもないというのが主な原因だろうという気がする」(『県民性 文化人類学的考察』一一頁、一九七一年)と述べている。

(36) 例えば、但馬会は兵庫県豊岡市を含む近隣の町の出身者により結成されている。会員の対象となつている市町村の中には但馬会とは別に町出身者だけの会を持っているところもあり、この二つの会の会員はほとんど重なることはないということである。単一の町出身者だけで結成している会の会員は、但馬会を会社の成功者などが集まる県人会のようなものとして位置づけていた。

(37) 阪神但東会の事務所は神戸市と大阪市に置かれていたということである。

(38) 岡橋秀典「広島県における農村からの人口流出と都市の同郷団体」『広島大学内海文化研究所』『内海文化研究紀要』18・19号、一五〇頁、一九九〇年。

(39) 次第に会誌の発行が年一回から何年かに一回になるなど活動規模が縮小している傾向にある。現在においても年一回の総会や故郷である但東町との交流は続けられているということである(役場への問い合わせ等から)。

(40) 湯浅俊郎「大阪都市圏における都市移住者の動向―石川県小松市、加賀市出身者(加賀浴友会)を事例にして―」『地域社会学年報第12集 生活・公共性と地域形成』、一三八―一五八頁、二〇〇〇年。

#### 参考文献

鯉坂学「都市住民と故郷との関連―広島大学総合科学部紀要Ⅱ『社会文化研究』第20巻、一二九―一六二頁、一九九四年。

「都市同郷団体の現状―東北地方を中心に―」『広島大学総合科学部紀要Ⅱ『社会文化研究』第21巻、一〇四五頁、一九九五年。

都市化社会における国内都市移住者の研究視座

都市化社会における国内都市移住者の研究視座

——「都市同郷団体の現状―甲信越地方出身者を対象として―」同志社大学人文学会『評論・社会科学』第56号、一〇二八頁、一九九七年。

——「都市同郷団体の現状とその存在の意味―全国市区町村調査及び加賀浴友会を中心にして―」第71回日本社会学会大会ポスターセッション共同報告原稿、一九九八年。

——「日本における同郷団体の現状―全国市区町村調査より―」同志社大学人文学会『評論・社会科学』第六四号掲載予定、二〇〇一年。

安齋他「出郷者の移動形態と母村の移動」『上智大学社会学論集』6・7、五八―一〇二頁、一九八一・一九八二年。

Gans, H. J., "Urbanism and Suburbanism as Ways of Life: A Reevaluation of Definitions," in A. M. Rose, ed., *Human Behavior and Social Processes: An Interactionist Approach*, Boston, 1962, pp. 625-648.

——*THE URBAN VILLAGERS Group and Class in the Life of Italian Americans UPDATED AND EXPANDED EDITION*, THE FREE PRESS, 1982.

Fischer, C. S., "Toward a Subcultural Theory of Urbanism", *American Journal of Sociology* 80, 1975, pp. 1319-41.

——, *Urban Experience, 2nd edition*, Harcourt Brace and Jovanovich, 1984.

——, "20 th-Year Assessment of Subculture Theory of Urbanism," *American Journal of Sociology* 101, 1995, pp. 543-77.

石原昌家「郷友会社会―都市のなかのムラ―」ひるぎ社、一九八六年。

磯村英一「磯村英一都市論集Ⅱ」有斐閣、一九八九年。

岩崎・鯉坂・上田・高木・広原・吉原編「町内会の研究」御茶の水書房、一九八九年。

神島二郎「近代日本の精神構造」岩波書店、一九六一年。

菊池美代志、一九九〇、「町内会の機能」倉沢・秋元編「町内会と地域集団」ミネルヴァ書房、二二七―三八頁、一九九〇年。

国民生活審議会調査部会コミュニティ問題小委員会「コミュニティ―生活の場における人間性の回復―」、一九六九年（地方自治制度研究会月刊「地方自治」2月号）第267号、帝国地方行政学会、一九七〇年、九八―一二八頁所収。

黒田俊彦「日本人口の構造転換〔増補版〕」古今書院、一九七九年。

松原治郎・似田貝香門編「住民運動の論理」学陽書房、一九七六年。

松本通晴「都市の同郷団体の性格」『京都市政調査会報』第六八号、京都市政調査会、四〇九頁、一九八七年。



松本通晴・丸木恵祐編『都市移住の社会学』世界思想社、一九九四年。

松本康「都市はなにを生み出すか アーバニズム論の革新」森岡・松本編『都市社会学のフロンティア』2 生活・関係・文化」

日本評論社、三三〇六八頁、一九九二年。

松本康編『21世紀の都市社会学』1 増殖するネットワーク』勁草書房、一九九五年。

松本康「都市社会の構造変容 都市社会—空間構造と社会的ネットワーク」奥田道大編『講座社会学』4 都市』東京大学出版

会、一〇五〇五八頁、一九九九年。

町村敬志「グローバル化と都市 なゼイラン人は『たまり場』をつくったのか」奥田道大編『講座社会学』4 都市』東京大学出

版会、一五九〇二二頁、一九九九年。

宮本憲一「都市経済論」筑摩書房、一九八〇年。

中田實「地域共同管理の現在」東信堂、一九九八年。

岡橋秀典「瀬戸内島嶼部における人口流出と都市の同郷団体」広島大学内海文化研究所『内海文化研究紀要』第15号、一五〇二六

頁、一九八七年。

「広島県における農村からの人口流出と都市の同郷団体」広島大学内海文化研究所『内海文化研究紀要』18・19号、一二七

〇一五七頁、一九九〇年。

奥田道大「都市コミュニティの理論」東京大学出版会、一九八三年。

奥田道大・田嶋淳子編著『池袋のアジア系外国人—社会学の実態報告』めこん、一九九一年。

「新宿のアジア系外国人—社会学の実態報告」めこん、一九九三年。

奥田道大・田嶋淳子責任編集『新版 池袋のアジア系外国人 回路を閉じた日本型都市ではなく』明石書店、一九九五年。

奥田道大編『21世紀の都市社会学』2 コミュニティとエスニシティ』勁草書房、一九九五年。

総務庁統計局『昭和六〇年国勢調査 モノグラフシリーズ No.2 人口移動』財団法人日本統計協会、一九九〇年。

鈴木栄太郎「鈴木栄太郎著作集VI 都市社会学原理」未来社〔一九五七〕一九六九年。

鈴木広編『コミュニティ・モラルと社会移動の研究』アカデミア出版会、一九七八年。

鈴木広「アーバニゼーションの理論的諸問題」鈴木・倉沢・秋元編『都市化の社会学理論—シカゴ学派からの展開—』ミネルヴァ

書房、二二九〇六〇頁、一九八七年。

都市化社会における国内都市移住者の研究視座

都市化社会における国内都市移住者の研究視座

祖父江孝男「国民性 文化人類学的考察」中公新書、一九七一年。

玉野和志「近代日本の都市化と町内会の成立」行人社、一九九三年。

富山一郎「近代日本社会と「沖繩人」」日本経済新聞社、一九九〇年。

Wellman, B., "The Community Question," *American Journal of Sociology* 84, 1979, pp. 1201-31.

Wellman, B. and S. Potter, "The Elements of Personal Communities," by B. Wellman, ed, *Networks in the Global Village: Life in Contemporary Communities*, Westview Press, 1999, pp. 49-81.

Wirth, L., "Urbanism as a Way of Life," *American Journal of Sociology* 44, 1938, pp. 1-24.

柳田國男「都市と農村」『柳田國男全集 29』ちくま文庫、三三三〜五四一頁、「一九二九年」一九九一年。

湯浅俊郎「都市同郷団体の生成と変容―石川県小松市、加賀市出身者を事例にして―」同志社社会学研究会『同志社社会学研究』

第3号、四一〜六四頁、一九九九年。

――「大阪都市圏における都市移住者の動向―石川県小松市、加賀市出身者（加賀浴友会）を事例にして―」『地域社会学会年報第12集 生活・公共性と地域形成』、一三八〜一五八頁、二〇〇〇年。

付記：この小論をまとめるにあたって、兵庫県出身者の都市同郷団体についての知見や、資料を提供して下さいました方々に心からお礼を申し上げます。

資料 5

生活よろず相談と案内

(注：氏名は◇で表記した)

「たんとう」の各号で述べましたが、会員のあらゆる問題の相談と案内をして、有無相通じ、問題の解決に努めたいと思いますので会員と郷里の方々の遠慮のない利用と投稿をお待ちしています。

特にこれからは京都但東会と共同出版いたしますので、郷里と京、阪神を結んでの本欄の活用を願いたいと思います。

進学、就職、転職、住宅の売買その他買いたいもの、売りたいもの、縁談では郷里から京阪神地方へ嫁ぎたい方、養子に生きたい方、京阪神から郷里へ帰りたい方、いろんな問題を紙面を通じて(匿名も可)どしどしお寄せ下さるようお待ちしております。

◎縁談

黄菊、白菊かおり高く、おめでたのご披露がつづく。

玉のごとき新郎と、花のごとき新婦の門出、幸多かれと折るご両親や仲人さんの配慮もあろう。趣味や職場での成果もあろう。相縁、奇縁、凡夫の目には偶然としかうつらぬことが、じつは遠く、かつ深き「見えざる力」にささえられているのではなからうか！

本会の縁談は次の要領で扱います。

申込も相当ありますが、今まで成立したのは次の三組で、大

体一年に一組できたことになりましたが、今回からは、京都但東会も加えて、京阪神と郷里とを結んで申込んでいただければ、もっと多く紹介できると思います。

初婚の方だけでなく、離婚した方、された方、未亡人なども遠慮なくご利用下さい。

なお、但東町の方は、京阪神地方の縁談だけでなく、農村から農村へ(但東町内または但馬地方)希望の方も歓迎しますから、その旨記入して申し込み下さい。

また、京阪神から郷里や農村へ生きたい方は、その旨ご記入下さい。

最近の傾向として、都会の男子は、農村の純朴な娘さんを希望する者が多くなり、農村の男子は女子が少い関係から、都会の社会で生活した人生経験豊かな人を求める方が多い傾向にあります。農業も今は近代化し、ほとんど機械化ができ、往時の過酷な労働はなくなり、都会の空気を吸った花嫁を希望する傾向のようです。農村の花嫁を希望する方は遠慮なく申込んで下さい。

◎縁談成立の近況

一、第一号

◇◇◇◇氏 (養父郡出身)

◇◇◇◇さん (八尾市) ◇◇◇◇氏長女)

昭和四十二年四月三十日結婚、目下京都府乙訓郡向日町◇◇

◇◇◇二九にて◇◇水道を経営、一女の親として生活中です。

二、第二号

◇◇◇氏 (美方郡出身)

◇◇◇さん (神戸) ◇◇◇長女)

昭和四十三年四月二十九日結婚、新郎は神戸市東住吉中学に勤務、一女を設けられました。新居は、神戸市須磨区◇◇◇一丁目一の二三

三、第三号

◇◇◇氏 (出合) ◇◇◇長男)

◇◇◇さん (福井県出身)

昭和四十四年四月二十一日結婚、新郎は大阪市 昭和産業株式会社勤務、新居は伊丹市◇◇◇◇◇、昭和産業(株) 宝塚寮

○これらの方は但東会のご縁で結ばれたことを忘れずに、これからの但東会の第二世の中堅として、会のために貢献されるよう要望するものである。

○縁談紹介の要領

縁談紹介の要領

一、学歴、初、再婚、年令に制限はありません。身許確実な方なら、他町、他県の方一どなたでも受付けます。

二、本会での相談内容はお互いに秘密を守ります。

三、なるべく本人がお申し込み下さい。但東町内の方は自筆の履歴書と身上書(文房具店にあるコクヨの履歴書用紙でよ

い)と写真をお送り下さい。

四、候補者が見つつかればその方のあらましをお知らせします。

五、調査はお互いに納得のゆくまでして下さい。

六、本人または家族の方で詳細知りたいことがあれば本会事務所へ電話または手紙で照会して下さい。

七、面談が決まりましたら日時は連絡します。

八、その後の進行に希望があれば協力します。

九、その他意見、希望は遠慮なくお聞かせ下さい。

一〇、相当数の申し込みができましたら、申し込者全員の懇談会やレクリエーション等を考えます。

一一、縁談が本会以外の所から成立した場合は速やかにその旨通知して下さい。

一二、できるだけ広い範囲の中から相手方を選びます。郷里や京都但東会からも申込歓迎します。

○嫁が欲しい(求妻)

男1、昭和十六年生、阪大工学部卒、伊丹三菱電機勤務、尼崎在住相手、二十四才位、短大以上卒業希望。

男2、但東町内、農家長男、二十八才、健康な方を望む。

男3、大阪府大経済卒、鹿島建設社員、二十九才、大阪在住。

男4、昭和十六年生、関学商科卒、飲食店経営、神戸在住。

男5、昭和十八年生、大阪電通大学電子科卒、大阪航空保安

事務所勤務、神戸在住。

男6、昭和九年生、電気会社員、相手方二十七才、三十才位の方、学歴を問わず、大阪在住。

男7、昭和十八年生、政法大学卒、大阪在住、金物工具商経営、相手方、二十二、三十才位の商売でできる方を求む。

男8、今宮工業高校定時制電気課卒、電気会社勤務、二十九才、羽曳野市在住。

男9、東京美術学校短大卒、中学教諭、二十八才、姫路市在住。

○嫁入りしたい(女性)

女1、昭和十七年生、私立女子高校卒、汽車製造勤務、大阪在住。

女2、昭和十七年生、出石高校卒、但東町在住、阪神地方へ嫁入希望。

女3、昭和十六年生、大阪歯科大卒、歯科医師、大阪在住。

女4、昭和十一年生、大阪大学看護学科卒、保健婦、病院勤務、神戸在住。

女5、昭和十九年生、尼崎高校卒、三菱商事勤務、尼崎市在住。

女6、昭和十年生、大阪キリスト短大卒、幼稚園教諭、大阪在住。

女7、昭和十五年生、山手女子学園卒、家事手伝、神戸在

住。

女8、昭和十七年生、宮津暁星高校卒、会社員、大阪在住。

女9、昭和二十四年生、豊岡高校卒、日本毛織勤務、古加川在住。

女10、昭和十八年生、豊岡家政学院卒、洋服店勤務、神戸在住。

女11、昭和二十年生、宮津高校、浪速短大卒、幼稚園教諭、大阪在住。

女12、昭和十三年生、宮津高校、大手前文化学院卒、栄養士、高槻在住。

女13、昭和十四年生、出石高校卒、家事手伝、尼崎在住。

女14、昭和二十年生、長田高校、武庫川短大卒、小学校教諭、神戸在住。

女15、昭和二十二年生、中学校卒、薬局店員、神戸市在住。

○養子 現在中学生位、成績優秀なれば大学進学も可、将来但東町内居住できる方。

以上の男女の方々は、身許確実な方々ばかりで、それぞれ適当な相手を探しておられますから、ご希望により、指名して応募されても結構です。本人さんの身許、性格、家族等はお知らせいたします。

◎求人案内

○店員、家事お手伝いさん、看護婦さんの求人があります。

郷里から都会へ就職して諸種の事情から、やめて郷里へ帰られた方で、再度阪神地方へ出られたい方は本会へ申込んで下さい。

○女子店員募集

郷里より大阪の定時制高校または短大に通学したい方、あるいは夜間洋裁学校などへ通学したい方は、昼間家事手伝いして下されば、相談に応じます。希望の方は本会事務所へ申し出て下さい。

会員動静と事務局から

① 会員のおくやみ

但東会のため、いろいろと協力いただきました、左記の方々が逝去されましたので、謹んで哀悼の意を表します。

(イ) 畑山出身の◇◇◇◇さんの奥さんは、二月十九日枚方で逝去されました。

(ロ) 中山出身、◇◇◇◇◇さんの母堂は、三月二十四日大阪で逝去されました。

(ハ) 木村出身、◇◇◇◇◇氏は病氣療養中の所、九月十三日大阪で逝去されました。会員の逝去でありますので、本会から◇◇◇◇◇氏が告別式に参列、香典をお供えしました。

(ニ) 木村出身の◇◇◇◇◇氏は胃がんのため、十月十九日逝去

され、本会から◇◇◇◇◇氏が告別式に参列、楯をお供えしました。

(ホ) 但東中学校勤務の◇◇◇◇◇先生は十二月四日、胃がんのため教理で逝去されました。

② 会員の消息

(イ) 本会役員、久畑出身の◇◇◇◇◇氏は三月二十八日付加西警察署長に栄転されました。

(ロ) 本会役員、小谷出身の◇◇◇◇◇氏は三月二十八日付兵庫県警の自動車隊長に栄転されました。

(ハ) 本会役員、太田出身の◇◇◇◇◇氏は九月三十日付で、阪神高速道路公団神戸管理部交通課長に栄転されました。

(ニ) 本会幹事、◇◇◇◇◇は昨春より明石市松ヶ丘二丁目、兵庫県住宅団地サービスセンターに勤務することになりました。ご用の節は勤務先または自宅までご連絡下さい。勤務先電話明石◇◇◇◇◇番



全国養蚕婦人体験発表会一位の

教森澄子さん……………役場産業課……………182

記者の声

生活よろず相談と案内……………(194)

会員動静と事務局から……………196  
編集後記……………200

出所…阪神但東会・京都但東会、一九七〇、「たんとう」第4号(〇は筆者補注)

資料6—2 (注…氏名は◇で表記した)

目次

大阪但東会総会記念写真		但東のまちに住んで……………出合市場	◇◇◇◇◇	12
但東自然ふれあいセンター「やまびこ」—建設中写真		世のうつりかわり……………会長	◇◇◇◇◇	14
巻頭言……………副会長	◇◇◇◇◇	熟年を迎えて……………正法寺	◇◇◇◇◇	15
大阪但東会々則……………	◇◇◇◇◇	会員からの便り……………	◇◇◇◇◇	16
事業報告……………	◇◇◇◇◇	登尾時懐古……………	◇◇◇◇◇	18
事業計画……………	◇◇◇◇◇	広告欄 カラーページ……………	◇◇◇◇◇	30
決算報告……………	◇◇◇◇◇	但東町ガイドマップ……………	◇◇◇◇◇	31
予算(案)……………	◇◇◇◇◇	役員名簿……………	◇◇◇◇◇	35
故郷からの寄稿……………	◇◇◇◇◇	会員名簿……………	◇◇◇◇◇	47
シルクロードのまち但東の現況……………	◇◇◇◇◇	編集後記……………	◇◇◇◇◇	
但東町ふるさと開発対策室長……………	◇◇◇◇◇	代表幹事……………	◇◇◇◇◇	
出所…大阪但東会、一九八五、「たんとう大阪」第3号……………	◇◇◇◇◇			10